

第 19 号(2009.12.24 配信)

今年も残る日々わずか。やがて迎える 2010 年は、21 世紀の the 1st decade (最初の 10 年) 締めくくりの年です。次の 10 年 (the 2nd decade) につながる話をしましょう。

20 世紀を生きてきた私たちは、10 年ほど前に、新たな 21 世紀を迎えるに際して、各人各様にさまざまな期待や関心を抱いていました。それらが今、それぞれに具体化してきています。私の大きな関心事の一つ、世界の動き・国際関係を例にとれば；

20 世紀は「アメリカの世紀」とまでいわれました。自動車、航空機生産の発達、第 1 次、第 2 次と二度の世界大戦いずれでも戦場とは無縁で、戦後の消費の拡大、産業・経済の巨大化と繁栄が「アメリカの世紀」と呼ばせたのでした。その 20 世紀が過ぎてわずか 9 年、「超大国アメリカ」「アメリカ一国主義」が急転し、世界を取り巻く情勢は激動し、国際関係はさまざまに変化しています。

日本でも、自民党が結党以来の長年にわたった第 1 党から転落して大変動が進行中。「政権交代」が今年の流行語大賞に選ばれたくらいです。しかも、世界もアメリカも日本でも、激動は今も盛んに進行中で、変動の速度まで前世紀に比べるとかなり早いのではないかと感じます。

そこで今回は、今年最後の「サロン便り」であり、オバマ特集が 2 回続いたので、世界の、あるいは国際関係についての「常識問題」おさらいの意味で、さまざまな国ぐにのグループや振興諸国の台頭を取り上げてお話ししたいと思います。「常識問題」といってはちょっときついかと思うけれど、皆さんの多くがご存じか、お聞き及びであろうと思い、そうはいつても、では説明してごらんといわれると戸惑うことであろうかと考え、「おさらい」をして来年につなげてみようという試みです。熟知の方も、正確には知らなかった方も無論あっていいのです。気楽に読み通し、「常識」を鍛え、勉強や用語の整理等に役立ててください。

G7 / G8

常識といえる「G7」。「先進国首脳会議」と呼ばれ、7 ヶ国持ち回りで通称「サミット」が年々続いています。けれど、その政治ショーより、むしろ実務上の機関が大事です。名称は The conference of Ministers of the Group of Seven。つまり「先進 7 ヶ国蔵相・中央銀行総裁会議」で、為替レートや金利水準など通貨問題を中心に、金融・財政問題について主要国間で政策調整するための機関です。緊急の参集もあり、この蔵相・中銀総裁会議の内容は、そのつど詳しく新聞や TV などで報道されています。

ところで、サミットの提唱は、1973 年の変動相場制への移行や石油危機など、ドルの「覇権」が衰え、世界経済の多極化傾向が明らかになったのがきっかけでした。経済・通貨危機が発端で、近年問題視されるドルの信認の揺らぎ(注:「信認」は信用して権威を認めること。特定の「通貨の国際的な信認」等)は、実は 40 年近くも前に始まり今日まで続いています。問題は一時的に収まったようにみえても、困難は一層広がって深刻化していると考えられます。

ちなみに、最初のサミットは、前述の経緯から 1975 年にフランスで開かれ、86 年の東京サミットまでは、アメリカ、イギリス、西ドイツ(当時)、フランス、日本の「G5」でした。やがてイタリア、カナダが加わり「G7」に。また、EC 委員長(今は EU)が別格で参加しています。さらに 97 年からは、ロシアがオブザーバーとして加わり、「G8」と呼ばれることが多くなりました。

「BRICs」と「VISTA」

今世紀に入って、新興諸国の中から、かねて近代化、工業化を推進し、経済成長率が高く、人口数も多く、資源も豊かな幾つかの国ぐにが抜け出てきました。世界経済発展の原動力にさえなって高い評価を得ている「BRICs」(ブリックス、sは小文字で)4カ国です。国名の頭文字から、ブラジル、ロシア、インド、中国の4カ国を並べた現今の常用語。もはや新語とは言えず、ご存じの方も大勢おいでのはずですが、どうでしょうか。

よく知られる通り、中国とインドは人口10億を超える超大国です。人口数の上位からいうと、断トツ首位の中国、2位のインドに次ぐ3位はアメリカ、インドネシア4位、ブラジル5位と続きます。ロシアは9位ですが、広大な国土があり資源も豊富で、すでに前記G8で先進国の仲間入りをしています。時と場合により「BRICs」と「I」をもう1字加え、「S」を大文字にして、上記のインドネシアと南アフリカ共和国を加えた6カ国が取り上げられることもあります。南アは人口5千万人とはいえ、アフリカで唯一インフラ整備が進み、電力企業がかねて会社研究の対象となるほどの“実力”を持ち、有力な資源国でもあります。

「VISTA」はBRICsに続く中堅5カ国。頭文字をとって、ベトナム、インドネシア、南ア、トルコ、アルゼンチン。国際通貨基金(IMF)が、最新の「世界経済見通し」で2010年の国内総生産(GDP)が単純平均で3%を超える成長地域(3.4%)として示しました。BRICsの平均成長率5.1%には及ばないものの、資源は豊富、外資の導入に積極的といわれます。

人口の多数は、労働力、引いては産業推進力の動員につながります。東南アジアで、ベトナムとインドネシア両国が優位に立っているのも、質の高い労働力人口が多く、中産階級の台頭など、成長可能な共通点があるからです。

かなり以前の話で恐縮ですが、オセアニア出張の一環でニュージーランド(NZL)とオーストラリア(豪州)両国の首都を往訪し外務省に表敬したことがあります。その折、NZLの経済担当官が、国内のヒツジの頭数は66百万頭(当時)だが人口はその30分の1しかないと苦笑し、美しい国土と爽やかな都市を持ちながら経済発展の勢いが伸びがたい国情を率直に語ったことを思い起こします。現在もNZLの人口はシンガポール並みの4百万、豪州の人口はマレーシアより少ない2千万人です。

G20

昨08年11月、例のサブプライム問題を発端に、アメリカ発の経済危機が全世界を襲いました。G7だけでは到底手に負えず、新興諸国からも首脳がワシントンD.C.に集まり「金融サミット」(金融市場と世界経済に関する首脳会議)が開かれました。「G20」の形成です。参集国はG7、BRICs4カ国のほか、アジアではインドネシア、韓国、サウジアラビア、欧州にまたがるトルコの4カ国、中南米のメキシコ、アルゼンチン2カ国に、南アとオーストラリアが加わり計19カ国、プラスEU。正確には「20カ国・地域」です。

G20は、首脳会議だけでなく、財務省・中央銀行総裁会議も相次いで開き、G7/8との関わりもあいまいになってきました。経済秩序・基軸通貨のあり方はもはや限られた7、8カ国の問題ではありません。すでに今年9月のG20首脳会議で、G20を国際経済協力の「第1のフォーラム(討議の場)」と位置づけ定例化を決めています。経済成長の勢いのある諸国が多く「2011年にG8消滅」の可能性も指摘されています。

G2(?)

米・中両国は、11月のオバマ訪中で「戦略的信頼」を構築する共同声明を発表し、二国間の問題だけでなく、経済、安全保障、核、温暖化など広範の諸問題で協調し合うことを誓い合いました。中国は、国内総生産(GDP)で日本に追いつき追い越し2位の座を確実にしています。世界銀行の報告書によると、中国は、アメリカ、日本、ユーロ圏のGDP減少分の4分の3を相殺する見通しというのですから、昨年来の金融危機による世界経済の落ち込みを救済し、牽引車の役割を演じ

ているといい得ましょう。

すでに今年 1~10 月に、新車の販売台数が 1,000 万台を超え、かつてのアメリカ、数年前の日本を、アッという間に抜いて、年間 1,300 万台との見通しです。だれがいうともなく「米中 G2」の時代という言葉がささやかれ始めました。しかし中国は、この表現に強く異論を唱え、「中国は途上国であり、今も変わらない」と主張し、きわめて消極的、むしろ否定的な様子です。

確かに、米中 2 強、という種の表現には、私たちも違和感を強く感じます。単に GDP の比較や車の売れ行き状況等、数字の積み上げだけで「国力」は計れません。一人当たり GDP は、十数億人の中国と、私たち日本とでは十倍以上の開きがあります。ほかにも数々の「物差し」で考えねばならないはずで

G4(?)

それやこれやの動きの中で、アメリカが新たに「G4」の打診を始めたらしい。アメリカのドル、EU のユーロ、中国の人民元という複数の基軸通貨時代がやってくることを念頭に、最初に述べた「蔵相・中銀総裁会議」を、国内総生産の規模からも日本を含めた 4 カ国で随時開いて協議、対処していく方策として浮上してきた話です。確かに G7 / 8 は G20 に飲み込まれそう。かといって 20 カ国・地域は機動性に欠き、早急に一致して結合できる実情にはない。そう思うと、一種の枠組みとして構想される事情も分かりますが、EU は矮小化を感じるだろうし、中国は G2 への否定的対応から賛意を示すでしょうか？

世界情勢は、多様な要素と諸国相互間の関わりをばらみながら、今後も揺れ動いていくでしょう。

なお今回は、ASEAN や、今も話が出た EU をはじめ、地域の連合、国際関係については書き記すことができませんでした。またの機会に、それらを取り上げて 2 回目の「常識問題」おさらいをしたいと思います。

(12月22日記。国際サブロー)